

su [su:l] **L**

Shiga University
Learning

'25/ vol. 23



SHIGA UNIVERSITY

教育実践優秀賞

(テーマ①アフターコロナを見据え、
オンライン・オンデマンドを取り入れた
新たな授業形態への挑戦)

(テーマ②PBLを取り入れた実践型教育の試み)

特集！

未来創生型文理融合教育に向けた新たな取組
(未来創生リベラルアーツプログラム)

(リベラルアーツ・STEAMプロジェクト認定・助成制度)

目 次

【教育実践優秀賞受賞者の取組 紹介】

テーマ①アフターコロナを見据え、オンライン・オンデマンドを取り入れた 新たな授業形態への挑戦

- 「オンライン教材【史センセイの声トレ道場】作成と配信～音声学、呼吸、
身体ストレッチ基礎から取り組む歌唱トレーニング」・・・・・・・・・・ 4
(教育学部 准教授 渡邊 史)

テーマ②PBLを取り入れた実践型教育の試み

- 「学生自ら課題を発見し解決策を考える—実践体験型教育—」・・・・・・・・ 6
(経済学部 教授 金 秉基)

- 「タイ研修ツアー」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
(データサイエンス・AI イノベーション研究推進センター
教授 深谷 良治)

- 令和7年度教育実践優秀賞（教員表彰制度）テーマ・・・・・・・・・・・・ 10

【特集】

未来創生型文理融合教育に向けた新たな取組

- 「未来創生リベラルアーツプログラム」・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
(教育・学生支援機構 特任准教授 大谷 宗啓)
(教育・学生支援機構 副機構長 松丸 真大)
(地域連携教育推進センター センター長 柴田 雅美)
(アントレプレナーシップセンター センター長 山下 悠)

- 「リベラルアーツ・STEAM プロジェクト認定・助成制度」・・・・・・・・ 17
(教育学部 教授 森 太郎)
(教育学部 准教授 岩井 憲一)
(教育学部 准教授 蔵永 瞳)
(教育学部 准教授 渡邊 史)

【トピックス&ニュース】

- SUCCESS 保護者向け機能の実装・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
オンライン授業に関する学生アンケート結果について・・・・・・・・ 25
教育改革関連最新トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

教育実践優秀賞受賞者の取組 紹介

◆テーマ①

『アフターコロナを見据え、オンライン・オンデマンドを取り入れた新たな授業形態への挑戦』

・「オンライン教材【史センセイの声トレ道場】作成と配信～

音声学、呼吸、身体ストレッチ基礎から取り組む歌唱トレーニング」

教育学部 准教授 渡邊 史

◆テーマ②

『PBL を取り入れた実践型教育の試み』

・「学生自ら課題を発見し解決策を考える—実践体験型教育—」

経済学部 教授 金 秉基

・「タイ研修ツアー」

データサイエンス・AI イノベーション研究推進センター

教授 深谷 良治

**オンライン教材【史センセイの声トレ道場】
作成と配信**

～ 音声学、呼吸、身体ストレッチ
基礎から取り組む歌唱トレーニング ～

教育学部 准教授 渡邊 史

本研究は2022-2023年度「放送大学教育振興会」の助成を受けて行ったものである。動画のプロトタイプは、COVID-19まん延における自粛時、附属小/合唱団メンバーの家庭内自主トレを目的に作成したものだ。

1. 【研究発案・実行の動機】

①自分の声に自信がありますか？

②声を「良くしたい」と思っていますか？

10年にわたりおよそ200名/年に対し、年度初め講義開始時にアンケートを行っている。回答内容割合は例年ほぼ変わらず ①[(声に)/自信がない75%/考えたこともない20%/自信がある4%]程度。②に対し [(声を)良くしたい]との肯定的回答が殆どだが、同時に [諦めている]、[声は生まれつきのもの]等の記述から「声の改善は不可能」と考えていることが読み取れる。これは現代日本社会における「声」への意識および扱いと一致しよう。①にYesと回答する人はほぼ無いのだが、「声」が人生における様々な場面において「重要な役割を担うものである」ことは社会的に認知され、「声表現能力」を高めたいとの想いを個々が有していることは確実だ。

ヒトは群れで生き、社会生活には他者との連携・コミュニケーションが欠かせない。2020年より施行されている『学習指導要領』の大きな特徴は、「自己表現」についての頻回な言及だ。これは教育現場、ひいては現代社会に対しての提案・要請でもある。筆者は、あらゆる場において汎用性の高い「伝える、伝わる、“表現ツール”としての声」の可能性のために、自発的かつ意識的に「声」をプロデュースしていくためのトレーニングプログラムを提供したいと強く希望して来た。当研究の

発案および実施目的は、個々人が「表現ツールとしての声」を自ら構築し、音声を「活用」するための動機づけを、広く社会に対し行うことである。

2. 【動画内容プランを立てるにあたって】

「初めて」に取り組む時、初心者は「努力したい」と思っても「努力の仕方それ自体、分からない」ことが多い。知識や経験がないと、上達の第一歩すら踏み出せないのだ。そこでまず、講義にて収集する「**声楽授業に際し期待すること**」を項目別にまとめて集計、コメント(自由記述)内容を精査し、「声」に対する興味・関心・希望を読み取った上で「初心者」が「新しいもの」と向き合っていく「初めの一步」を提示できるよう、プランをたてた。

全体件数 494名		2020、2021、2022年度【初等音楽科内容学】 (初等免許必修講義) 受講者より採取	
「期待」項目	件数		
【技術】に 関すること	346	「歌唱行為」への 取り組みに対する心情	96
音域・声域について	62	歌唱の「知識」に 関すること	21
ヴォリュームについて	17	「講義」自体への 取り組みに対する心情	43
音色について	48	将来的な 教職従事意識に 関すること ★B	54
音痴・音外れの悩み	43	その他	67
腹式呼吸の知識・技術に ついて	13		
その他 ★A	163		

【図1】声楽授業に際し、期待すること
2020-2022年度 494名より収集

★A：自由記述例

正しい発声とは何か知りたい 裏声を出したい カラオケを上手になりたい
歌うことに慣れたい 喉を傷めない声で歌いたい いい声だと言われたい
恥ずかしくない歌を歌いたい 苦手を克服したい 肺活量をつけたい
できないことができるようになりたい 好きな曲を歌えるようになりたい

★B：自由記述例

児童生徒の手本になりたい 教師としての声の使い方を学びたい
生徒に教えられる知識を身につけたい 歌を教える者としての勉強がしたい
合唱コンクール指導ができるようになりたい

【図2】自由記述より抜粋例/★A/★B

3. 【トレーニングプログラムの特徴】

各トレーニングは「動画と一緒に取り組む」形とし、a)平易、b)行動内容が明確、c)個々に目的を設定できる…すなわち、「ルーティンワークの提案」が主眼である。トレーニングのポイントを知識として簡潔に挿入し、対

象者が理解・納得しながら視聴できるよう工夫した。所要時間の目安は3分/1本、自発的に「継続しやすい」ことに留意し、さらに、具体的かつ理論的であることに注意した。

ヒトは通常、発声・呼吸器官を用いて「発声」しており、それらのシステムはいずれも筋肉運動に拠る。「音声」は各器官の用い方によって変化するが、音声を「目的に応じた音程やリズム」をもって変化させつつ「呼吸のコントロール」を高度に用いた表現が「歌唱」である。歌唱を始め、自身の音声表現に悩みやコンプレックスを持っている場合、その課題点の多くは「具体的な方法」をもって改善が可能だ。これらはスポーツと同様である。周知のように、スポーツ分野にて、「気合と根性」で走ったり跳んだりする時代は終わった。理論的知識に基づく指導のもと、適切…すなわち安全に身体運動を行うことは、今や常識である。しかし、教育現場における「音楽」の指導においては、「しっかり！元気に！がんばって！」の声かけが主流のように思われる。「音声表現」に関して、我が国は未だに「後進国」であると言わざるをえない。

4. 【動画内容、コンテンツ紹介】

- 〈0.〉予備トレーニング
 - 1 全身ストレッチ -2 あくびストレッチ
- 〈1.〉基礎トレーニング
 - 1 舌根柔軟体操 -2 声帯ストレッチ
 - 3 声のピッチトレーニング
- 〈2.〉呼吸トレーニング
 - 1 瓶トレ …横隔膜チェック
 - 2 プレストレーニング① …ペットボトルぶくぶく
 - 3 プレストレーニング② …ぶくぶく歌唱
- 〈3.〉パーツトレーニング
 - 1 舌の体操 -2 タントリル
 - 3 唇の体操 -4 リップロール
- 〈4.〉母音構築
 - 1 顔トレ …フェイスマッピング
 - 2 母音づくり① …ペットボトル蓋トレ
 - 3 母音づくり② …割り箸トレ

【図3】 トレーニング動画タイトル一覧
動画は、全15タイトル作成。いずれも「ボディ・マッピング」「イメージトレーニング」の要素・効果を重視しており、「身体のどの部

分を（それは身体のどこに、どんなふうにいるもので）、どのように、どんな目的で働かせているか」が明確であることを、取り組み者自身が「理解・納得」した上で行うことを重視している。理論と知識をもとに「自分の様子を確認する」「”あらかましい状態”と自身を比較する」「”適正さ”のために工夫と微調整を意識的に行う」こと、すなわち客観的な視点による自己観察を習慣づけることが目的である。各トレーニングには「具体的な自助努力」ができる状態を設定している。歌唱行為のみならず、「意識的、能動的」に、つまり「向上心をもって取り組む」ことは、学びの過程において大きなエネルギーとなる。トレーニングに明確な目標と気づきを持つことは、トレーニング自体の質、そして後の結果に大きな影響をもたらすからだ。

5. 【結びに】

当該動画は大学における講義の参考資料として用いているが、学生たちから「家族も共に取り組んでいる」「知人に動画 URL を送った」など、紹介しあって視聴者が増えているようだ。教育現場のみならず、高齢者、障害者施設においても活用されており、取り組み者のステイタスに拘わらず、個々の自発的習慣行動を導くための一端となっている。「1日ひとつ選んで、やっています」との声が嬉しい。

ウィルスまん延の影響で長く続いた「音声発信への忌避」が我々にもたらした影響は大きい。ことに生育期にある子どもたちの「表現力」育成・構築への影響については問題視され、各機関が調査に乗り出している。しかし「表現手段・声」の重要さに、多くの人々が気づきつつあることも確かだ。これを「機」として逃すべきではない、と強く考えている。



【史センセイの声トレ道場】全タイトル

学生自ら課題を発見し 解決策を考える

—実践体験型教育—

経済学部 教授 金 秉基

1. PBL を取り入れた実践体験型教育

世界が直面している様々な課題を自ら発見し、その解決策を考えるきっかけを与えることを目標に、ゼミでは次の二つの教育を行った。第一に、途上国が抱えている様々な課題を自分の目で確かめ、現状改善のための解決策を考える。第二に、世界のビジネス中心地であるシリコンバレーでイノベーションとアントレプレナーシップを考える。

2. ラオスプロジェクト

国際社会が掲げる、誰一人置き去りにしないという「持続可能な開発目標 (SDGs)」の実現のために、小さな力であっても自分にできることは何かを考えるきっかけを与えてきた。普段のゼミでは、途上国の貧困問題や不平等、教育開発、SDGs などについて調べてディベートしたり、グループごとにテーマを設定し、そのテーマに関連する資料やデータを収集し、データ分析を行ったりする。またラオス国立大学などと連携しながら、ゼミ生自ら「ラオス大学生との交流活動や小学校支援活動、現地企業訪問」を企画する。春学期に学んだ知識と自ら企画したラオスプロジェクトをベースに、夏休みには実際ラオスに足を運んで次の三つの活動を行う。

①ラオス国立大学での学生交流 (SDGs 1, 2, 4, 6 について学ぶ)

両大学の学生が特定のテーマについて発表し、ディベートを行う。この活動を通じて、ラオス国立大学の学生は日本についての理解を深める。ゼミ生は、ラオスの社会・経済・

教育などについて理解を深めるとともに、対ラオス支援について考える。

図1 ラオス国立大学での学生交流



②少数民族の小学校支援活動 (SDGs 3, 4, 6, 12 について学ぶ)

滋賀大学経済学部近隣の小学校で集めた文房具や古着、サッカーボールなどを物が不足しているラオス農村部の小学校へ持って行き寄贈する。この活動を通じて、貧困問題や資源配分の重要性を学ぶ。また、小学校では「なぜ手を洗わなければならないのか」を教えることで小学生の衛生意識を高めるだけでなく、ゼミ生がSDGsを一層深く理解する。

図2 農村小学校での文房具寄贈



図3 手洗いを教える



③現地企業や JETRO、JICA 訪問 (SDGs 17 について学ぶ)

ラオス現地企業を訪問し、フェアトレードや BOP について学ぶ。また、JETRO や JICA を訪問し、地域の経済・社会に関する説明を受けることでラオスの経済状況、日本の開発援助や国際協力について詳しく学ぶ。

上記の活動をしながら収集したデータやアンケート調査を用いて論文を執筆し、全国大学生論文大会で発表する。2011 年から行ってきたラオスプロジェクトは、ゼミ生が自ら課題を見つけ、その解決策に向けてプロジェクトを企画、実施、事後評価する実践体験型教育である。

3. シリコンバレーで学ぶイノベーションと企業家精神

未来社会をデザインしていく若者が異文化を理解し、多様なバックグラウンドを持つ人々とコミュニケーションが取れる人材育成、そしてグローバル企業のイノベーションとアントレプレナーシップのトレンドを学ぶことを目標に、シリコンバレー研修を行った。

ゼミでは、「なぜ企業や労働者はシリコンバレーに集積するのか」について調べるとともに、社会から求められるデータサイエンス、AI、スタートアップなどに関する資料を収集する。夏休みにはシリコンバレーに出向き、二週間の研修を行う。この研修を通じて今後社会で活躍するであろう学生に机上で学んだ知識を実際に応用するきっかけを与える。研修の内容は主に次の三つで構成される。

①アントレプレナーシップや AI 分野の専門家、シリコンバレーで起業し、企業を経営している CEO などの講師からシリコンバレーのビジネストrendについて学ぶ。

②Apple, Google, Intel, Tesla などのグローバル企業を訪問し、それらの企業の設立背景や成長過程、イノベーションについて学ぶ。

③参加学生がグループごとに分かれ、お互い

が協力しながら商品開発と資金調達を通じて起業を目指したプロジェクトに取り組み、完成したプロジェクトを講師や CEO の前でプレゼンテーションする。

この研修を通じて、企業集積と外部経済、イノベーション、シリコンバレーのビジネス文化についての理解を深める。

図4 企業訪問 (Google)



図5 企業訪問 (Intel)

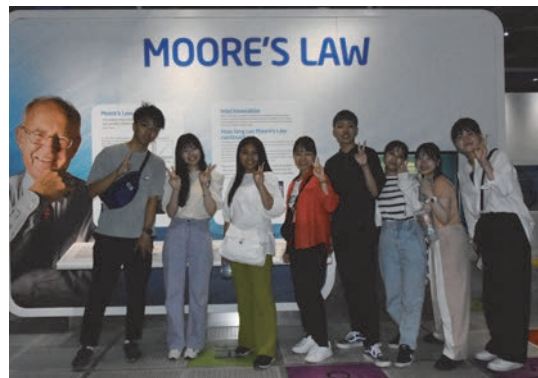
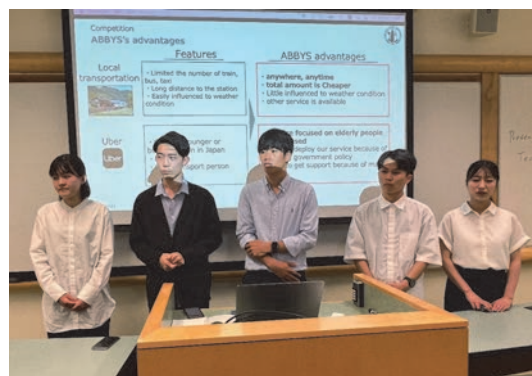


図6 プロジェクトの発表



タイ研修ツアー

データサイエンス・AI イノベーション研究推進センター 教授
深谷良治

1. 概要

2023年9月4日(月)から9月12日(火)までの日程で、タイ王国においてスタディツアーを実施。データサイエンス学部学生6人、データサイエンス研究科学生3人、教員3名が参加し、タイ王国におけるモノづくり教育の現状、DXの状況、現地日本企業の現状(現地陵水会会員との意見交換含む)、歴史文化など様々な分野について学ぶ機会を設けた。

9月4日	出国(名古屋~バンコク)、歓迎会
9月5日	泰日工業大学(TNI)、TNICとの交流
9月6日	泰日工業大学(TNI)交流、陵水会OB訪問
9月7日	古都アユタヤ訪問
9月8日	タイ財閥CP(チャロン・パカボン)訪問
9月9日	タイ市内散策(with TNIC学生)
9月10日	タイ市内散策(with TNIC学生)
9月11日	NTTデータ(タイ)訪問
9月12日	帰国(バンコク~名古屋)

表1 研修ツアースケジュール

2. 泰日工業大学(TNI)との交流

2022年9月に連携協定先大学であるTNIから学長と副学長が来学し、学術交流協定、学生交流協定の更新締結式を行った。それを受けてTNIとその下部組織である泰日国際ナショナルカレッジ(TNIC)との交流プログラムを2023年9月に実施することとなった。バンコクに着いた日の夜の夕食会での心温かい歓迎を受けて、双方の教員と学生の交流がスタートした。

TNIとの交流プログラム初日はキャンパスツアーで、もの作り教育の現場として旋盤、NC機器、ロボットなどの実習設備を見学し、

実際に手に触れる体験学習も行った。

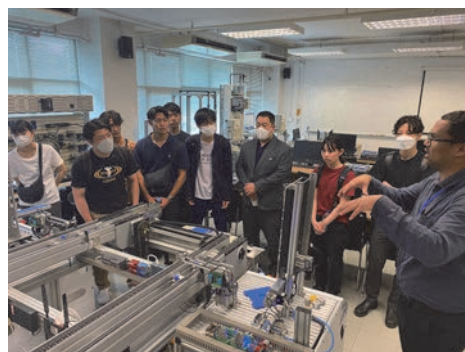


図1 NC機器の実機による説明

データサイエンスコースの学生との交流としては、「デザイン思考」の授業が行われ、大学近くのカフェの顧客データ分析によるビジネス価値創造ワークショップを行った。

交流2日目は、サバイバル・タイ語研修やタイ伝統音楽レッスンを実施。タイの学生たちとの文化交流を深めた。これと並行して滋賀大とTNIの教員間で、互いの研究内容の紹介などの意見交換も行った。



図2 タイ伝統音楽レッスン

夕方からは、バンコク市内で陵水会タイ支部の先輩方との意見交換会が行われ、国際ビジネスの最前線で活躍する滋賀大OBの方々から学生は薫陶を受けた。世界に広がる人脈の大切さを実感できる会となった。

3. タイ財閥CPグループ訪問

CPグループはタイ最大の企業グループであり、食品、小売り・ドラッグストア、テレ

コム・デジタル、不動産、製薬・病院、自動車・再生エネルギー、金融といった幅広い分野で事業展開している。今回の訪問は、小職と長年の知己であるグループCTOの好意で実現した。CPグループは通常は教育機関による見学は受け入れておらず、本学学生にとって希少かつ貴重な機会となった。

CPグループはセブンイレブン14,000店舗、大手スーパーLotus 2000店舗を擁する。今回はDX化の進んでいる先進的な小売店舗を訪問し、無人レジ、ダイナミックプライシングタグ、顧客の動線分析などを見学した。

午後には、CPグループの研究拠点 True Digital Parkにて、デジタルイノベーションのショーケースを見学し、データサイエンスやAIをビジネスに活用した事例を紹介された。具体的には、スマートコンビニストア、スマート養豚所、スマート養鶏所、スマートエビ養殖所、スマートヘルスケア等の応用事例の詳細な説明を受けた。

特にスマートエビ養殖では、日本のAIスタートアップの技術にいち早く出資してその技術を取り入れ、ビジネスに生かしたことも説明された。

タイのリーディングカンパニーが、デジタル変革にスピード感をもって取り組んでいることを目の当たりにした学生は、「日本の産業は先を走っている」という先入観が覆された様子であった。



図3 スマートエビ養殖の説明

4. NTT データ (タイ) 訪問

小職がかつて拠点長を務めていたNTTデータ・タイ現地法人を訪問。タイ国での銀行業界のDX事情、顧客へのデジタルマーケティングにおけるデータ分析、日系自動車会社へのITソリューション提供におけるプロジェクトマネジメントなどの事例説明を受けた。

具体的なDX事例を通じて、顧客ニーズにどう答えるか、プロジェクトを円滑に進めるための人間力の重要性などを学生は学んだ。

午後にはデータ分析・可視化ツールであるTableauの使い方のレクチャーを受け、グループ演習とプレゼンを通して簡潔かつ効果的に分析結果を可視化してプレゼンすることの大切さを学生はハンズオンで体得できた。



図4 Tableauのグループ演習

5. 帰国後報告会

帰国後に、主な気づきと学び体験を共有する報告会を実施した。参加者全員がそれぞれの報告を対面で実施し、以下のような活発な意見交換もなされた。

- ・得られた人脈を将来大切に活用する。
- ・何事にもトライする気持ちを生かす。
- ・異文化の人々と深く交流し、相互理解する。

6. 謝辞

今回の研修ツアー実現に向けてご尽力いただいた国際交流課やDS連携事業推進の皆様、小出英樹彦根商工会議所顧問、同僚の佐藤正昭先生、村松千左子先生に感謝の意を表したい。



令和7年度

教育実践優秀賞 のテーマ

(テーマ2)

◆オンライン・オンデマンドを取り入れた新たな教育形態への挑戦

アフターコロナの新たな授業形態として、第4期中期計画では、オンライン・リモートを活用するハイブリッド型教育を目指しているところである。新たな授業形態の一つとして、オンライン・オンデマンドを活用して教育効果向上に取り組んだ実践例も併せて募集する。

(テーマ1)

◆「教養」と「専門」を融合させた未来創生型文理融合教育の試み

令和4年度より、リベラルアーツ・STEAM教育研究センターを設置し、「総合知」の創出・活用に資するべく共通教養教育を改革するとともに、特定の専攻分野の課題探究はもとより、他分野の知見も含めた幅広い社会の課題への応用力を有する人材を養成することを目指している。

そして、令和6年度から「未来創生リベラルアーツプログラム」を始動し、「正解のない問い」に向き合う人材を育成する21世紀型教養教育の実践を目指している。こうした背景から、実践型教育の事例や分野横断型の教育実践事例といった新たな授業に関する試みを募集する。



特集！

未来創生型文理融合教育に向けた新たな取組

持続可能な未来社会を見据え、文理融合(STEAM)教育をより一層推し進めるため、未来創生型人材育成に向けた文理融合教育を開始しました。リベラルアーツ教育と専門知の組み合わせにより、数理・データサイエンス・AIリテラシーを身に付けた上で、分野を横断する幅広い知識や、総合的な知、俯瞰的視野や課題発見・解決力といった思考・能力を備え、社会への価値の創出を可能にする人材の育成に向けて令和6年度から新たに導入しましたプログラム・制度をご紹介します。

・「未来創生リベラルアーツプログラム」

教育・学生支援機構 特任准教授 大谷 宗啓

教育・学生支援機構 副機構長 松丸 真大

地域連携教育推進センター センター長 柴田 雅美

アントレプレナーシップセンター センター長 山下 悠

・「リベラルアーツ・STEAM プロジェクト認定・助成制度」

教育学部 教授 森 太郎

教育学部 准教授 岩井 憲一

教育学部 准教授 蔵永 瞳

教育学部 准教授 渡邊 史

未来創生リベラルアーツ プログラムの取り組み

教育・学生支援機構 特任准教授
大谷 宗啓

1. 取り組みの背景

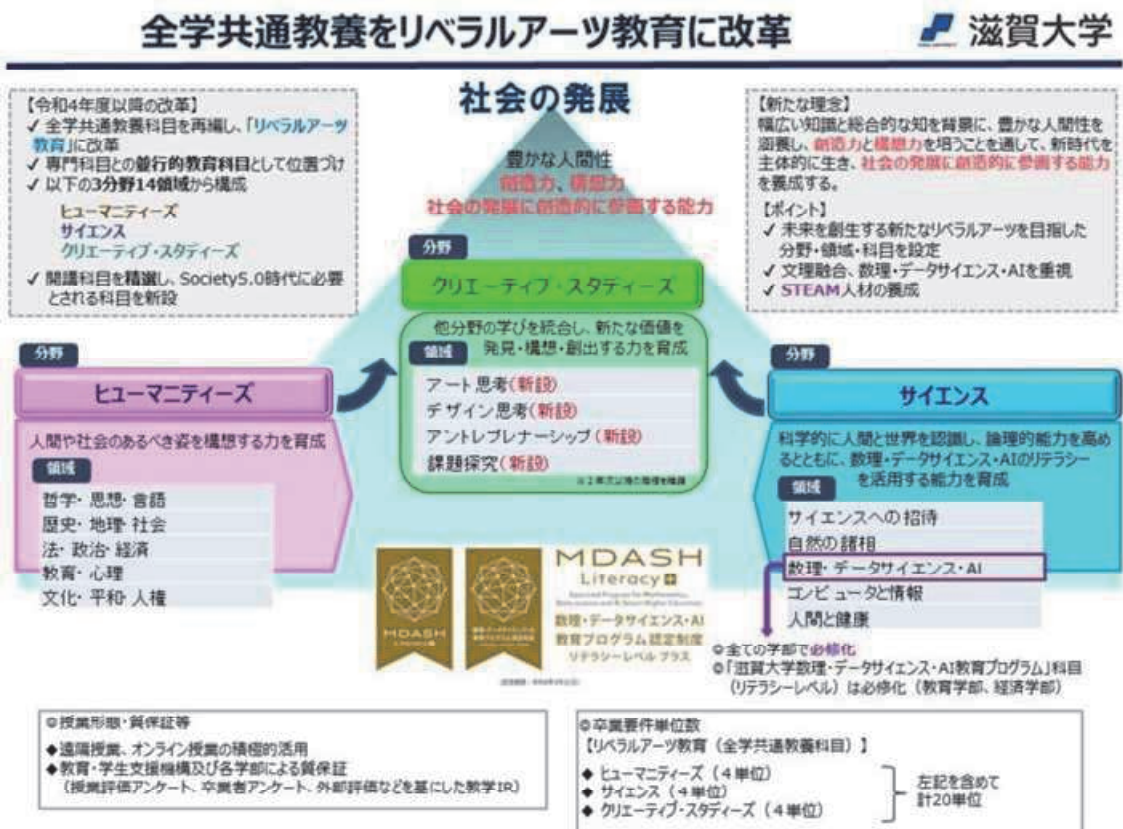
中央教育審議会第211号、通称GD答申は、2040年頃の日本が、第4次産業革命を経たSociety5.0への移行、少子高齢化、グローバル化、地方創生の必要がそれぞれ進行した社会状況にあると予測し、その展望を踏まえて今日の高等教育が目指すべき姿として、予測不可能な時代を生きる人材の育成、学修成果の可視化、研究力の強化、産業界との協力・連携、地域への貢献を強調しました。その後、日本は予測以上の少子高齢化の進行、コロナ禍を契機とした遠隔教育の急速な普及や生成

AIの台頭、国際情勢の不安定化等、GD答申が想定した以上の激変に直面しています（中教審第255号）。

こうした予測困難な状況（Volatility、Uncertainty、Complexity、Ambiguityの頭文字からVUCAと呼ばれます）において、新たな社会的価値を創造し、よりよい社会を形成し得る未来創生型の人材を育成するために、滋賀大学は二次にわたる改革に取り組んできました。

2. 第一次改革

令和4年度以降の第一次改革では、全学共通教育を、ヒューマニティーズ、サイエンス、クリエイティブ・スタディーズの3分野からなる文理融合型のリベラルアーツ教育に整理再編しました。リベラルアーツとは、人間を自由にする基礎的な学問です。ここでの「自由」は、人間の精神を種々の拘束や偏見から自由にすることを意味します。それは、あらゆる状況を越えて働く知であり、予測困難な



画像出所 https://www.shiga-u.ac.jp/program/curriculum/liberal_arts/

状況において一層有用性を発揮します。滋賀大学のリベラルアーツ教育は「豊かな人間性とグローバルな視野を備えた専門性の高い職業人の養成と、創造的な学術研究への挑戦を通して、人類と社会の持続可能な発展に貢献する」ことを基本理念とし、大きく2つの特徴をもっています。第1に、専門科目履修前の基礎教養として位置付けるのではなく、専門科目と併修する科目として位置づけていることです。これによって、リベラルアーツ科目×専門科目の相乗作用の発揮と、多様な専門性を有する受講者がそれぞれの専門知を持ち寄り集うことによる総合知の生成を企図しています。第2に、数理・データサイエンス・AI教育プログラムのリテラシーレベル+（プラス）に認定された科目を全学部で必修化していることです。Society5.0の基礎的な素養を全ての学生が身につけることによって、先述の相乗作用と総合知の生成を支えるとともに、後述の複眼的思考と課題解決、価値創造の基盤とすることを企図しています。また、学修成果を可視化し、産業界や地域への説明力を高めるオープンバッジを発行しています。

3. 第二次改革

令和6年度以降の第二次改革では、「未来創生リベラルアーツプログラム」を始動しました。このプログラムでは、リベラルアーツ3分野を偏りなく履修した上で、分野横断・複眼的思考が求められる「リベラルアーツ総合探究Ⅰ」と、社会課題の発見と共同解決が求められる「リベラルアーツ総合探究Ⅱ」のいずれかを履修し、課題レポートを提出することが修了要件となります。課題レポートでは、自身が身につけようとした知識体系に名前をつけ、選択した科目との関連を説明し、そこで得た学びを自らの専門分野と未来の生活にどう活かすかを説明することが求められます。この課題では、自らの学びを自律的にデザインする力と、他者に説明する力が問われます。このプログラムの修了者にもオープンバッジ

が発行され、学位取得にとどまらない学修成果を証明します。

同じく令和6年度以降、分野横断、学生との協働、教育DX、社会との連携のいずれかをテーマとした挑戦的な取り組みを支援する、「リベラルアーツ・STEAM教育プロジェクト認定・助成制度」を始動し、初年度から大きな成果を挙げています。

勿論、これらの取り組みは特設科目にとどまらず、全てのリベラルアーツ科目・専門科目のひとつひとつにおける学びと、科目間の相乗作用を必要とするものです。そのため、教学マネジメント、シラバス改革、そして個々の科目担当者のご尽力のもと、全学を挙げて取り組んできました。次ページ以降、各科目・プロジェクトのご担当者から、具体的な取り組みと成果をご紹介します。

4. 滋賀大学の特色、「強み」

滋賀大学は、その前身である滋賀県師範学校と彦根高等商業学校以来の長きにわたり、高度な専門性を備えた職業人の育成を使命としてきました。また、日本で初めてデータサイエンス学部・研究科を設置し、経済学研究科に日本で初めてのMBAN（Master of Business Analytics）コースを設置する等、先駆的・先導的役割も果たしてきました。それらの蓄積と先端性を生かして、よりよい未来を創生する人材を育成していくことが期待されます。加えて、滋賀大学は伝統的に、彦根キャンパスと大津キャンパスが相互に高い独立性を有し、それぞれ独自の文化を築いてきました。それを一体感の低さといった弱みとして捉えるのではなく、複眼的思考を育み、新たな価値を生み出す素地に適した強みとして捉えて、積極的に生かしていくことが求められます。未来予測が困難なこの時代、私たちは危機に直面すると共に、滋賀大学生と滋賀大学の新たな社会的価値、新たな未来を創り出す、大きな可能性を手にはしています。

リベラルアーツ総合探究 I

教育・学生支援機構

副機構長・教育学部教授 松丸 真大

【授業の目標と概要】

「リベラルアーツ総合探究 I」は、「リベラルアーツ総合探究 II」と並んで、本学の「未来創生リベラルアーツプログラム」を締めくくる分野横断型科目である。それぞれが学んできたことを総合して課題に向き合い、それを通して自身が築き上げてきた価値観を問いなおすことを目標としています。

現代は VUCA の時代（予測不可能な時代）と呼ばれており、正解がある問いばかりがあるわけではありません。問題の本質は何かを考え、自ら課題を立て、それを解決する方法を考えるという力は、将来どのような職業に就くにせよ必要になる力だと考えています。

そこでこの授業では、「分野横断」「複眼的思考」をテーマとし、教育・経済・データサイエンス前学部長による豪華リレー講義により、2つのテーマについて異なる観点からの講義を展開します。受講生には既存の知識から一旦離れて「常識とは何か」について考えてもらい、異なる学部からの学生とグループワークを実施します。

【授業の構成】

今年度は表のようなスケジュールで進めました。授業では、まず竹村彰通学長・渡部雅之理事・松丸から滋賀大学におけるリベラルアーツについて説明した後（1～3回）、「AIは人間を支配できるか?」「原発は必要か?」という2つのテーマについて、各学部の教員が話題提供を行います（4～6、8～10回）。グループワークを挟みつつ各学部の教員の話聞き、受講生自身が、そしてグループがどのように考えるかを議論していきます。グループ内の議論がある程度進んだ段階で、話題

提供をおこなった教員が互いに議論し、また受講生とも質疑をおこない（12回）、これらをふまえ最終的にグループ発表を行いました。

回	内容
1～3	滋賀大学におけるリベラルアーツ 竹村彰通（学長）・渡部雅之（理事） 松丸真大
4～6	テーマ① 「AIは人間を支配できるか?」 椎名洋（データサイエンス学部） 徳田陽明（教育学部） 中野桂（経済学部）
7	グループディスカッション(1)
8～10	テーマ②「原発は必要か?」 椎名洋（データサイエンス学部） 徳田陽明（教育学部） 中野桂（経済学部）
11	グループディスカッション(2)
12	3学部教員によるトークセッション
13	グループディスカッション(3)
14～15	成果報告会

【授業を終えて】

授業最終日におこなったアンケートでは「他の人の意見をたくさん聞いて、自分の意見をもう一度考えてみるというサイクルが何度もあることや、自分の意見を人に伝えるために必要な語彙力や話し方を学ぶことが出来た」など、授業の目標に合った肯定的な意見をもらえました。

この授業は、受講生自身の専門的知識を活かしつつ、他の専門分野の立場も踏まえることで、各自の専門分野ごとの「常識」を客観的にとらえ、複眼的な思考を磨くことを目指しました。また、専門分野で学んでいる内容を生かしつつ、他学部学生とのグループワークを通じて課題解決方法を考え、「正解のない問い」について向き合う力を身につけることを目指しました。それらを達成するためには今後も継続的な授業改善が必要だと考えます。

リベラルアーツ総合探究Ⅱ

「高校生の地域活性化アイデアをカタチに」

地域連携教育推進センター

センター長・特命教授 柴田 雅美

【授業の概要】

この授業は、滋賀大学と連携協定を結ぶ平和堂・麒麟ビール・ブリヂストン（HKB）主催のプロジェクト「彦根の熱き高校生の街おこしの夢を応援！熱き高校生の地域活動支援」へ応募のあった598件のアイデアの中から審査会で優秀賞に選ばれた3企画「ひこねばずる」（近江高校）、「彦根城ガイドツアー！」（彦根東高校）、「学生と外国人観光客の交流で笑顔溢れた地域へ」（立命館守山高校）の実現に向けて、滋賀大学生が高校生・企業と協力しながら地域社会の課題に取り組む経験を積むことで、実践的なスキルと幅広い知識・創造的思考を育むことを目的としています。

【授業の構成・成果】

授業は8月20日から8月23日の4日間の集中講義形式で行いました。1日目はオリエンテーション、高校生によるプレゼンテーション、担当テーマの決定、チームビルディングを行います。2日目はアイデア実現の具体的なプランニングと企業人によるコーチング、3日目はプロトタイプ作成、4日目はプレゼン資料作成と発表準備、HKBの役員等による最終審査会を実施します。そして、審査会で最優秀に選ばれたアイデアは、企業の支援を受けながら製品化・サービス化に向けたプロジェクトを立ち上げることになります。

選ばれた3企画に対し、学生が6チームに分かれてアイデアの実現に取り組みました。

学生が提案したプロジェクト

- ① 武士体験ツアー
- ② 外国人観光客に彦根の魅力を伝えるツアー
「Hikone joy! joy! joy!」
- ③ 車椅子で彦根巡りプロジェクト
- ④ 学生ガイドで町おこしプロジェクト

- ⑤ 学生×外国人彦根ベストショットツアー
- ⑥ 表が彦根モデルの絵、裏面には彦根に関する豆知識やクイズを書いた「ひこねばずるプロジェクト」



高校生とのグループワーク

最終審査会では、「学生×外国人彦根ベストショットツアー」が最優秀賞に選ばれ、この企画の実現化に向けて、高校生3名と滋賀大学生3名によるチームを結成しました。そして、12月15日に滋賀大学留学生数名を対象としたイベントにて検証等を行い、2025年春の本開催を目指しています。

【授業を終えて】

取り組みを通じて学生たちは実際の社会課題に対する解決策を考え、実行する力を鍛えています。一方で、高校生のアイデアや問題意識の背景や前提の深掘りは十分にできていなかったと思います。次回にはアイデアや問題意識の前提や思い込みを捉え直して、次のアイデアを考え出せる仕組みを取り入れたいと感じました。これは、課題解決が命題となっている現代において求められる、その課題は本当に課題なのかを問い直す（課題の本質に迫る）力のトレーニングになるからです。そして、リベラルアーツ教育は、幅広い知識と創造的思考を備え、価値を自ら生み出していく人材を育成するために不可欠です。プロジェクトを通じて、学生たちは地域社会の課題に取り組み、価値を創造する経験ができたと思います。さらに一歩進んで、課題の前提や思い込みを問い直す力を身につけ不確実性の時代を生き抜く人材を育てたいです。

リベラルアーツ総合探究Ⅱ

アントレプレナーシップセンター

センター長・経済学部准教授 山下 悠

【授業の概要】

今年度から開始された「滋賀大学未来創生リベラルアーツプログラム」のうち、地元企業などと連携して、社会課題(企業または地域が抱える課題)の解決を目的とした授業である「リベラルアーツ総合探究Ⅱ」を、アントレプレナーシップセンターの提供科目として担当させていただきました。どんな社会課題に着目して、どんな企業と連携するかは私の裁量に任されておりましたので、2023年12月に滋賀県中小企業家同友会青年部とアントレプレナーシップセンターと共催で滋賀大学講堂にて開催した「滋賀の虎：学生に評価されない会社に未来はない」において、挑戦者として事業計画をプレゼンテーションしていただいた株式会社お米の家倉の家倉敬和代表取締役様に打診したところ快くお引き受けいただきましたので、農業についての2つの課題(短期的・長期的1個ずつ)について、グループワークを通じて新たな商品もしくはサービスの企画を行う授業を実施しました。

【授業の構成・成果】

この授業では、デザイン思考を用いた商品企画のプロセスを、参考書として指定した『1からの商品企画』で学ぶとともに、それを用いて家倉様が抱える2つの課題に対して解決策を考えることができるようになることを目標としました。そのため、2回目の授業で家倉様に「米農家の現実と展望」というテーマで講演していただいた後に、3回目の授業で商品企画のプロセスの概要を説明し、知識の共有化を行いました。4回目の授業からは、①探索的調査、②コンセプトデザイン、③検

証的調査、④企画書作成の4つの段階の最後にチェックを行うステージ・ゲート法を用いるため、各段階で「グループワーク(授業2回分)+プレゼンテーションと家倉様・私からの評価(授業1回分)」を行うかたちで授業を実施しました。

この授業には4回生5名、3回生3名、1回生4名の計12名の学生が履修しました。3名のチームを4つ作り、1つの課題に2チームが挑戦して、最終回の授業で実施するプレゼンで優勝チームを決める形式としました。起業家体験プログラム「Startup Weekend」に参加するなど商品企画の経験がある学生が必ず1名はチームにいるとともに、できるだけ他の学年の学生と交流できるようにチーム分けを行いました。この効果は①探索的調査の段階から発現され、参考書にも掲載されておらず、私も説明を行わなかったマーケティング戦略の基本道具である「STP分析」にしたがい、全チームが異なる顧客層をターゲットとして活動していたのには驚かされました。

最終回の授業でイベント企画のプレゼンテーションを行った2チームについては、授業終了後も家倉様と活動を続け、ともに3月2日(日)にイベントを開催するべく準備を行うなど一定の成果は出たと感じています。

【授業を終えて】

授業後に実施した独自の授業評価アンケートでは、「チーム内で授業に対するモチベーションが異なり、授業外の時間にもっと活動したいと思っていたが、チームのメンバーが動かず活動できずに悔しかった」や「プレゼンに含めるべき内容の説明があまりなく、ここまで何を行ったのかの説明ばかりになってしまった」などがあり、学生の授業の進め方や私から伝える部分については改良を行いながら、来年度もこの授業を開講する予定にしています。

リベラルアーツ・STEAM プロジェクト認定・助成制度

滋賀大学リベラルアーツ・STEAM 教育研究センターが目標とする文理融合型教育を推進するため、各教職員からの申請に基づき、大学教育においてリベラルアーツ・STEAM 教育を取り入れた挑戦的な新規取組を支援する認定・助成制度を令和6年度から設けました。

＜プロジェクト項目＞

- ①分野横断プロジェクト（教養科目と専門科目の知識の融合を目的としたプロジェクト）
- ②学生との協働プロジェクト（学修者本位の取組を推進するプロジェクト）
- ③教育 DX プロジェクト（オンライン・オンデマンドやデジタルコンテンツ等を活用するプロジェクト）
- ④社会との連携プロジェクト（企業や地域社会、小中高と連携した課題解決型（PBL）プロジェクト）

上記項目にて募集を行った結果、6名の教員から応募があり、そのうち4名の教員のプロジェクトを認定いたしましたので、その取組成果をお伝えいたします。

社会との連携プロジェクト 実施科目「環境教育概論」

教育学部教授 森 太郎
〔協働者 教育学部教授 石川 俊之〕
久保 加織

【プロジェクト概要】

本授業は全学共通教養科目（教育学部1回生必修）であり、274名の学生が受講しました。「食農環境分野」、「湖沼環境分野・生物多様性分野」、「環境教育分野」で授業が構成されており、地域の生産者と連携した田植え・稲刈り、琵琶湖の湖上体験といった実体験を伴う学習を展開しました。このような実体験をきっかけに受講生が食・農・環境について社会に目を向けて課題を発見し、その解決のために自ら行動し、深く学べるようなPBLを実施しました。なお、本授業で生産した米は、地域の酒造会社（北島酒造株式会社）と連携して、滋賀大学オリジナル日本酒を製造して

います。この取り組みに関しても、仕込み体験など本授業の受講生の一部が関わりました。

【プロジェクト成果】

本プロジェクトは以下の通り実施しました。

- 1) 実体験を伴う実習を実施
 - ① 地域の生産者と連携した稲作実習
(田植え：4/27, 28、稲刈り：8/23, 24)
 - ② 収穫した米を使った各家庭での炊飯・試食実習（10～11月作成した炊飯の動画教材を活用）
 - ③ 琵琶湖の湖上体験学習（春学期）
- 2) 実体験をきっかけとしたグループでの食・農・環境に関わるPBLを実施（4～1月）
 - ① 7～8名を1グループとし、グループで課題、計画を設定（5月末提出、教員から各グループにコメント）
 - ② PBLを実施（Teams上に常時経過報告、教員はアドバイスをを行う）、動画で成果を提出（～12月）
 - ③ 各グループの活動動画に関する発表会

(動画を閲覧し、Teams 上で質疑・応答、1月)

2024年度 環境教育概論 食農環境分野 探究的な学習 成果報告会
動画ファイル
お米を通して食べ物の大切さを知ってもらうには
米粉で広がる食の未来～お米の可能性を深める～
米粉ドーナツ
稲わらの歴史と利用方法～稲わら加工を通して～
米粉で広がる食の未来～米の普及率向上に向けて～
米の消費量低下に対して私たちができることは
米離れを防ぐにはどうすればよいのか
日本人の米離れ問題 ～問題の背景と探究活動からみる～
お米の良さを著者に伝えよう!
米の無駄をなくすための取り組み
幼稚園で田植え体験：幼稚園児に米について興味をもってもらうには
米粉の可能性

成果報告 (一部抜粋)

本授業では、「生産者への取材をもとに、紙芝居を作成し、地域の児童クラブで読み聞かせを行う」「幼稚園で稲作に関するワークショップを行う」「米粉フェアなどのイベント参加による学習、継続的な試作を行い米粉のオリジナルレシピを考案し、学園祭や地域の児童クラブなどで提供することを通して、食・農・環境について発信する」等の様々な取組が発表され、1回生の必修科目において、地域での稲作の実体験をきっかけに、受講生が食・農・環境について社会に目を向けて課題を発見し、その解決のために自ら行動することを通して、深く学べるPBLを実施することができました。

社会との連携プロジェクト 実施科目「自然体験実践演習」

教育学部教授 森 太郎

〔協働者 教育学部教授 石川 俊之〕
〔久保 加織〕

【プロジェクト概要】

本演習は教育学部環境教育専攻の選択必修科目であり、11名の学生が受講しました。身近な自然や生活の中で自分と環境との関わりに「気づき」、「理解し」、「行動を起こせる」子供を育てるためには、知識と環境の大切さを学ばせるだけでなく、具体的な活動や体験を通して、人や社会、自然との関わりに関心を持たせることが大切であることから、本演

習ではこのような活動や体験を企画し、教育実践ができる教員を養成することを目的とし、地域の親子への自然体験活動について、受講生が企画・準備・実践・評価を行いました。

【プロジェクト成果】

滋賀大学教育学部、大津市石山市民センター、地域ボランティアスタッフが共同で実施している「石山っ子わくわく親子で畑体験隊」(毎週水曜日 15:30～17:00 に滋賀大学大津キャンパス内の農場で実施)において、受講生もスタッフとして参加しました。

数名の受講生を1グループとして、「イネの栽培」「花の栽培と利用」「蚕の飼育と利用」など活動を企画立案・準備・実施するテーマを決定しました。その後、各グループでテーマに関する専門的内容について自ら学習し、活動の進め方について学生間や学生と教員間で議論しながら企画・立案、準備するようにしました。なお、同学期に栽培に関する科目として、栽培学、栽培実習Ⅰを開講しており、学生の学びが繋がるように学習内容を設計しています。また、現在学校教育では地域や保護者との繋がりが重要視されていることから、学生には地域のボランティアスタッフや保護者とも議論を行うようにしました。このような準備のもと、学生が中心となって、参加者である子どもと保護者に対して活動を指導し、その後、活動について議論し、評価しました。

学生のレポートからは、「教育実習前に子どもに指導したり関わったりする経験ができてよかった」「保護者や地域のボランティアスタッフと関わることができ、保護者や地域の方との関わり方を学べてよかった」「体験活動を行う際の指導者間の情報共有や連携の大切さを学んだ」「今回の演習で教師への志望意識がより高まった」など、地域社会との連携したプロジェクト、学生との共同プロジェクトを行った学習成果が見られ、教員養成において自然体験活動を教育する授業としては効果的なものであったと考えられます。

教育 DX プロジェクト 実施科目「情報学への招待」

教育学部准教授 岩井 憲一

【プロジェクト概要】

一般に授業内容が受講生にとって満足いくものかを知るために、各セメスターの終わりに「授業アンケート」を実施しているが、ラーニングアナリティクスの観点から、セメスター途中でも把握できるように毎授業後にコメントを求めて整理・分析を行うシステムの導入について検討してきました。本プロジェクトでは、試作した簡易型サーバレスラーニングアナリティクスシステム SiLA (Simplified Learning Analytics) を当該授業に導入し、教学 IR 分析やラーニングアナリティクスにつながる流れを取り入れて学修成果の可視化を実施することで、セメスター期間内でのよりきめ細やかな指導につなげることを目的としました。

【プロジェクト成果】

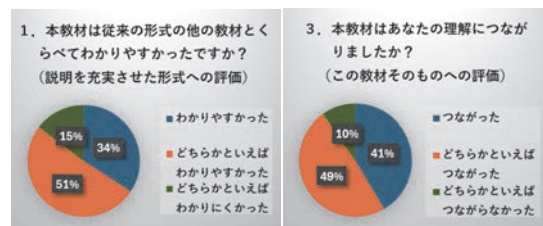
SiLA は、単なる情報収集だけではなく、収集したアンケート情報を「授業日毎」、「学籍番号毎」に自動で振り分けて整理することができます。アンケート項目は「理解度」、「満足度」、「コメント群」となっており、「理解度」と「満足度」を高群と低群の観点で整理し、グラフに示すことで学修成果の可視化を実現しています。

本プロジェクトでの主な目的は学生指導のための様々な観点の抽出・追加と、受講者数に応じたスケーラビリティの向上ですが、当該授業は今年度 188 名の登録者がオンデマンドで受講しており、出席管理など、システムによる授業支援がなければとても成り立たない状況であったため、本プロジェクトの遂行によって、スケーラビリティの高い授業支援が実現できました。具体的には、Google サーバの仕様からそのサーバとのやり取りに時間

制限があることから、システム構成を機能別に分割することと、クライアント側の時間短縮を併用することで、この問題を完全解決には難しいですが、運用面では実質的にほぼ回避することができました。

受講生からは「この学びから、自分が「常識」と思っていることも、視点を変えれば別の解釈があることを実感しました。これは、異なる文化や価値観を持つ人と接する際にも応用できると感じています。相手の立場や考え方に寄り添い、柔軟に受け入れることで、新しい発見や成長につながるのではないかと思います。このように、情報学を学ぶことは単なる知識の習得ではなく、自分の思考の幅を広げ、物事をより深く考える力を養うことにつながると感じました。学んだことを日常に応用しながら、これからも新しい視点を大切に、柔軟な思考を磨いていきたいと思えます。」等の肯定的な意見がありました。

そして、特にインタラクションが難しいオンデマンド授業では優れた教材が欠かせないことから、筆者はこれまでに「注釈充実化教材」という、例えばスライド教材であればそれをなぞることで理解が自然と進むように注釈を充実させた教材を作成してきたが、アンケートした結果、この教材についても肯定的な結果を得られました。



アンケート結果 (抜粋) ※有効回答数 41 名

さらに、授業期間を通じて得たアンケート情報を t 検定と分散分析を行うことで理解度における学部間の差を確認することができました。この差はこれまでの情報学や数学に対する取り組み方により生ずるものと考えられます。

分野横断プロジェクト 実施科目「心理学概論」

教育学部准教授 蔵永 瞳
(協働者 教育学部教授 芦谷 道子)

【プロジェクト概要】

本プロジェクトでは、2つの活動を通じて、「心」を横断的かつ複眼的な視点で捉える試みを行いました。

活動①ヒューマニティーズとサイエンス

心理学研究をデータサイエンスの観点から考える内容の動画を制作し、授業で公開しました。本科目は全学共通教養科目の中でヒューマニティーズ分野に位置づけられますが、制作した動画はデータサイエンスに焦点を当てたもので、両分野の視点を融合させる内容でした。

活動②「心」の専門性についての内側と外側

外部講師を招き、ミニシンポジウムを開催しました。講師には、教育臨床の現場における専門家3名を招聘し、子どもを支援するときの「心」の捉え方について講演いただきました。このシンポジウムを通じて、複数の職種立場から子どもの「心」の支援について考える機会を提供しました。

【プロジェクト成果】

活動①授業動画の制作

本科目の担当者である蔵永・芦谷が実施した研究について、データに主眼を置いた対談を実施し、授業動画として公開しました。対談は、データを取得する背景や工夫について説明し、互いに質問する形で進行了しました。その中では、心理学の知見がデータの蓄積により構築されることや、批判的視点をもって研究知見を捉えることの重要性について述べました。

受講生からは、「研究実施の際には、目的に基づき対象や指標を吟味してデータを取得する必要があると学んだ」、「研究の背景や手続

きを知ることで、研究結果についての理解が深まった」等の感想が得られました。この活動を通じ、受講生は、心理学の研究知見がデータの蓄積によって成り立っていることを具体的な研究事例を通じて学び、ヒューマニティーズとサイエンス分野が密接に関わっていることを理解することができたと思われま

活動②シンポジウム開催

講師として招聘したスクールカウンセラー(心理領域専門)、スクールソーシャルワーカー(福祉領域専門)、スクールロイヤー(司法領域専門)それぞれが、学校現場での職務内容、子どもとの関わり方、支援の中での「心」の捉え方について講演を行いました。また、参加者が具体的な対応事例について質問し、講師が答える場面もありました。



シンポジウムの様子

受講生からは、「職種は違っても、子どもを支えるという共通の目標を持って連携することの重要性を考えさせられた」、「教員は、子どもたちの様々な背景に目を向け、連携して支援に取り組むことが重要であるし、それが可能と感じた」等の感想が寄せられました。受講生は、子どもの「心」を支えることは心理学の専門職だけでなく、子どもを取り巻く多様な立場から行われることを学校現場という実社会の視点から学ぶことができたと思われま

プロジェクト全体を通して

これらの活動により、受講生は「心」を多角的な視点で捉えることができたものと考えられます。

教育 DX プロジェクト 実施科目「合唱 I・II・III」

教育学部准教授 渡邊 史

【プロジェクト概要】

“Unlocking Potential Together! univ.
+elm.” 略【UP! Together】



秋学期 開講【合唱】(音楽免許:主・副 必修科目) 受講者(10名)を主軸メンバーとし、教育学部附属小・中学校、さらに学内のみならず外部からの参加者も幅広く受け入れたプロジェクトです。

演奏楽曲は、A. L=Webber 作曲のミュージカル“The Phantom of the Opera”よりメインテーマを選択しました。

参加者個々が“メロディモチーフ”“セリフ”“ヴォイス”の三種類から任意のものを選択し、音声データとして提出、それを1本の作品としてミキシングします。そして、成果発表としてYouTube(渡邊史・公式 研究チャンネル)にて一般公開しました。

【プロジェクト成果】

当初の予想以上の参加者があり、4歳から80代まで幅広い年齢層、立場から延べ87名のエントリーがありました。

■「ヴォイス」サンプル

<https://youtu.be/4w9NvA6xjTY>

■「メロディモチーフ mix」サンプル

<https://youtu.be/UCqQ025L3M8>

■配布カラオケ

<https://youtu.be/dJP5jo0X9gQ>

このような資料を共有しながら音声データを揃え、集めた音声をミキシングしました。

■本番ステージ リリース

<https://youtu.be/6EyzJ7zt-F4>



参加者に育むことが期待されていたこと

- ★「音表現」としての「声」生成を自発的に創意工夫する
- ★自身の「声」を「音」として客観的に精査する
- ★共通の目的に対して協働し、具体的な計画をもって臨む
- ★「顔を知らない」他者と明確な目的のもとに協働するクロスオーバー的コミュニケーションの体験

参加者への聞き取りから、いずれも有効であったことが確認されました。主軸である教育学部生からは「5小節歌うのに12テイク取り直した」「自分の声がこんなふうだと初めて知った」等の声があり、公立小学校音楽教諭からは「“ヴォイス”を録音するため、児童が主体的に様々な工夫をしていた」との報告を受けています。

録音もスマートフォンなど、手持ちのデバイスで十分なクオリティを得ることができ、“Forms”でのエントリー、“LINE オープンチャット”でのデータ授受など、既存のシステムを活用することで、全国どこからでも参加しやすく、参加者全員がスムーズに取り組むことができました。今後、拡大を計画している「遠隔型協働イベント」の実施シミュレーションとしても十分に機能しました。

今回参加できなかった方々からも、「次のチャンス」を望む声が多数あり、次年度のプロジェクト継続を視野に入れていきます。

トピックス & ニュース

- ◆ SUCCESS 保護者向け機能の実装
- ◆ オンライン授業に関する学生アンケート結果について
- ◆ 教育改革関連最新トピックス

SUCCESS 保護者向け機能の実装

学務課 大岩 和人

2025年度より、保護者がSUCCESS上で学生本人の成績を閲覧できる機能を実装いたします。これにより、以下の3つの課題を解決することが可能となります。

1. 保護者への確実な成績情報の伝達

これまででは年に1回、郵送により保護者へ成績を送付していましたが、以下のような課題がありました。

- ・保護者自身が開封しているか不明である。
- ・住所の間違いにより届かない場合がある。
- ・学生が先に成績表を回収し、保護者が受け取れないケースがある。
- ・保護者から「成績表が届かない」「いつ送付されるのか」といった問い合わせがあった。

新機能により、保護者はリアルタイムで成績情報を確認でき、確実な成績情報の伝達が可能となります。

2. 事務の省力化

郵送作業には人的・物理的リソースが必要であり、省力化・ペーパーレス化の観点からも課題がありました。本機能の導入により、事務作業を大幅に削減することができます。また、成績情報の電子化によって業務の効率化が進み、今後の大学業務のデジタル化推進にもつながると期待されます。

3. 保護者向けサービスの向上

近年、保護者と学生、また大学との関係が変化しつつあると考えています。例えば、保護者が学生の現状を積極的に把握したいと考える傾向が強まっており、学生に関わる具体的な問い合わせも増えています。このような中で、保護者向けのサービス向上は必然の流れであり、本機能の実装がその先駆けとなると考えます。

また、成績情報をオンラインで提供することにより、保護者と大学のコミュニケーションがより円滑になり、学生の学習状況についての情報共有がスムーズに行えるようになります。これにより、学習支援や進路相談の場面でも、保護者と大学が協力しやすくなると考えられます。

他大学における保護者向けサービスの状況を調べてみると、全国86の国立大学のうち、何らかの保護者向けのHPを有している大学は23大学ありました。また、各国立大学が利用している教務系システムの多くは、標準パッケージとして保護者向け機能を備えています。これには、成績確認機能だけでなく、履修確認や出席確認機能も含まれています。本学においても、将来的な保護者向けサービスの充実を見据え、まずは成績情報確認機能をミニマムな形で導入することとしました。

【具体的な実装内容】

- ①入学時に保護者のメールアドレスを収集
- ②保護者のメールアドレスに、ID・パスワードを送付
- ③ID・パスワードを使用し、保護者用SUCCESSにログインして学生の成績を確認



(成績閲覧画面イメージ)

今後は、成績情報の提供にとどまらず、履修情報や学習支援サービスの提供など、家庭と大学が連携しながら学生の学びを支援していく枠組みを強化していくことが必要であり、保護者向けのオンラインサービスを充実させることで、大学全体の教育環境の向上にも寄与できるようシステム改善を行っていきます。

オンライン授業に関する学生アンケート結果について

オンライン授業（ハイブリッド授業、ブレンド授業を含む。）に関する満足度を把握するため、令和2年から「オンライン授業に関する学生アンケート」実施しています。今年度は令和6年度学生生活実態調査のなかでオンライン授業に関する学生アンケートを実施しました。

全回答者のうち、令和6年度にオンライン授業を受けた感想としては「良かった」、「やや良かった」と回答した学生の割合は横ばいでした（R5：82.6%→R6：81.6%）。また、今後もオンライン授業が継続するとしたらどのように考えるかの設問についても、「賛成」、「やや賛成」と回答した学生の割合は横ばいでした（R5：84.8%→R6：86.9%）。

以下、自由記述欄に記載があった意見のうち、今後のオンライン授業の実施にあたって参考になりそうな意見を紹介します。

【よかったところ】

- 聞きたいところを何度も巻き戻して聞き直すことができるのが良いと思う。（教育学部学生）
- 天候に関係なく、必ず授業を開講できるので良いと思う。（教育学部学生）
- 就職活動で対面での参加が困難なことが多くあり、オンライン授業があることで授業に参加することができた。（経済学部学生）
- オンラインの方が複数回見ることができるのでより理解が深まっていると感じる。（経済学部学生）
- 通学時間が長く、負担になっているので、オンラインで自宅から受講できるのはありがたい。（経済学部学生）

【改善してほしいところ・その他意見】

- 人数が多く、聞くことがメインの授業はオンラインでよい。（教育学部学生）
- 通学時間が長い楽にはなるが、提出課題等やらなければいけないことが増え、課題の提出が活動のメインとなってしまい、授業の理解度と言った部分では疑問が残る。（教育学部学生）
- オンライン授業（ハイブリッド等）は分かるが、オンデマンド授業は時間割上で他の科目と被るとどちらかが履修できなくなるので、集中講義などのように別枠にしてほしい。（経済学部学生）
- 対面授業よりも集中できない。実際の授業時間よりも長い時間の動画があって、毎週視聴するのが大変だ。（経済学部学生）
- 先生によってオンライン授業の質が異なりすぎる（経済学部学生）
- 教員によってはやや声が聞き取りづらいことがあったので改善を望みます（対面授業を録画して配信する形の授業だったのでパソコンのマイクではなく、ピンマイクないしヘッドセットマイクを用いると改善が見込まれるとおもいます）。（データサイエンス学部学生）
- オンライン授業（同時双方向型）におけるグループワークは、コミュニケーションの取りやすさに難があるため、オンライン授業（同時双方向型）では、グループワークをあまり行わないでほしい。（データサイエンス学部学生）

本学では、第4期中期目標・計画期間において、対面授業にオンラインを組み合わせるハイブリッド型教育の充実により、柔軟で複合的な学びを実現することとしています。上記アンケート結果にもあるとおり、学生のなかでも肯定的意見・否定的意見さまざまあるようです。

アフターコロナにおける新たな授業形態を模索するにあたり、ハイブリッド型授業実施のための教育環境の整備、授業改善を行うとともに、学修成果を適切に測定・評価し、ハイブリッド型教育の質を高めていくことが今後ますます重要になります。引き続き、学生の意見を継続的に集めつつ、学内外のハイブリッド型教育に関する知見について共有してまいります。

学部生へのアンケート結果

※研究科・専攻科を割愛

今年度、オンライン授業(対面授業との併用であるハイブリッド授業、対面授業を組み合わせたブレンド授業を含む。)を受講して、あなたは総合的にどのように感じましたか。

【人数】

(人)

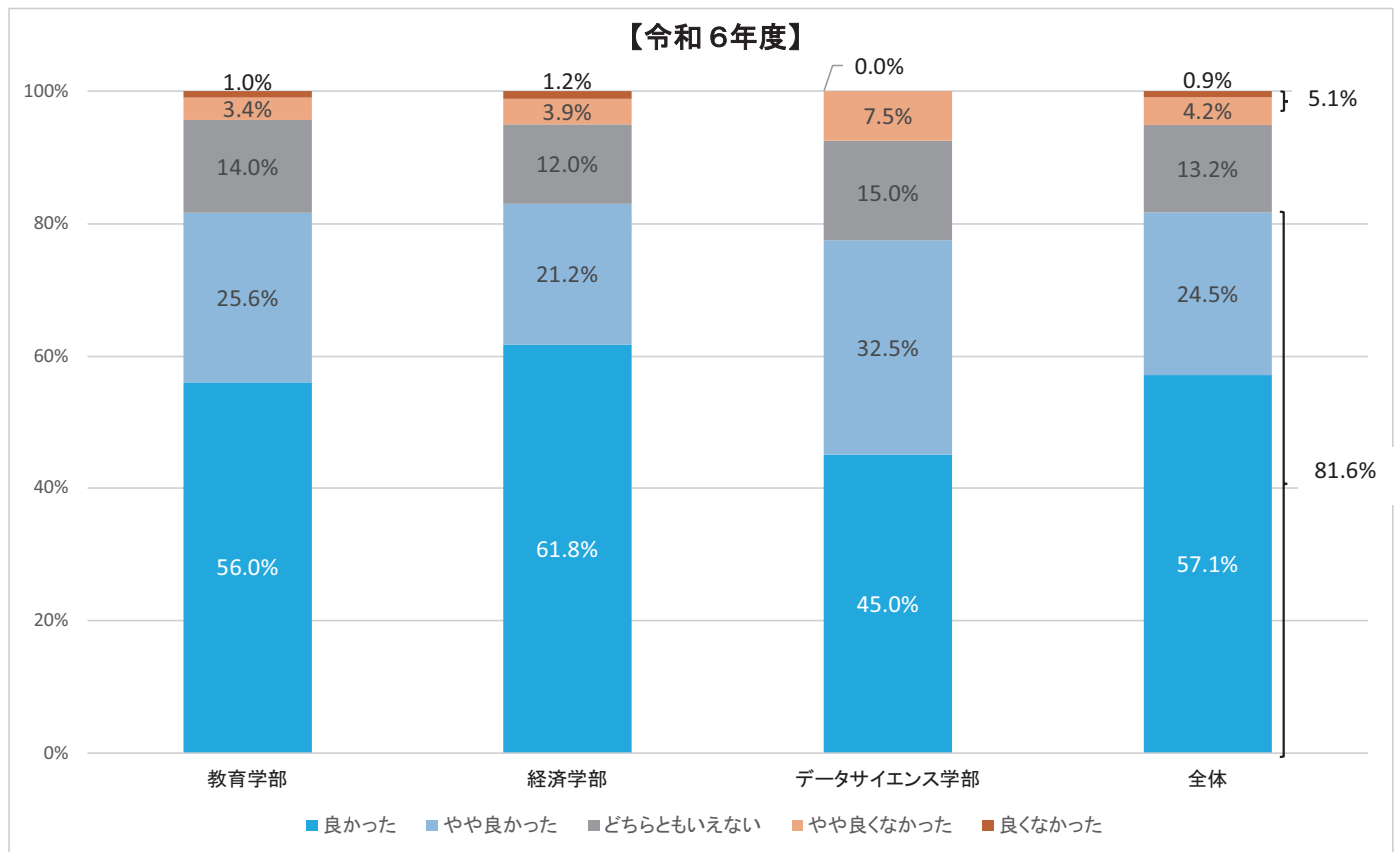
所属	良かった	やや良かった	どちらともいえない	やや良くなかった	良くなかった	総計
教育学部	116	53	29	7	2	207
経済学部	160	55	31	10	3	259
データサイエンス学部	36	26	12	6	0	80
全体	312	134	72	23	5	546

※研究科・専攻科を割愛

※オンライン授業を受講していない 34人除く

【所属別割合】

所属	良かった	やや良かった	どちらともいえない	やや良くなかった	良くなかった	総計
教育学部	56.0%	25.6%	14.0%	3.4%	1.0%	100%
経済学部	61.8%	21.2%	12.0%	3.9%	1.2%	100%
データサイエンス学部	45.0%	32.5%	15.0%	7.5%	0.0%	100%
全体	57.1%	24.5%	13.2%	4.2%	0.9%	100%



アンケート実施期間 令和6年12月2日～令和6年2月7日
 アンケート実施方法 令和6年度学生生活実態調査<学業>に含めて実施
 回答率 約17.3%

学部生へのアンケート結果

※研究科・専攻科を割愛

今後もオンライン授業(対面授業との併用であるハイブリッド授業、対面授業を組み合わせたブレンド授業を含む。)が継続するとしたら、あなたはどのように考えますか。

【人数】

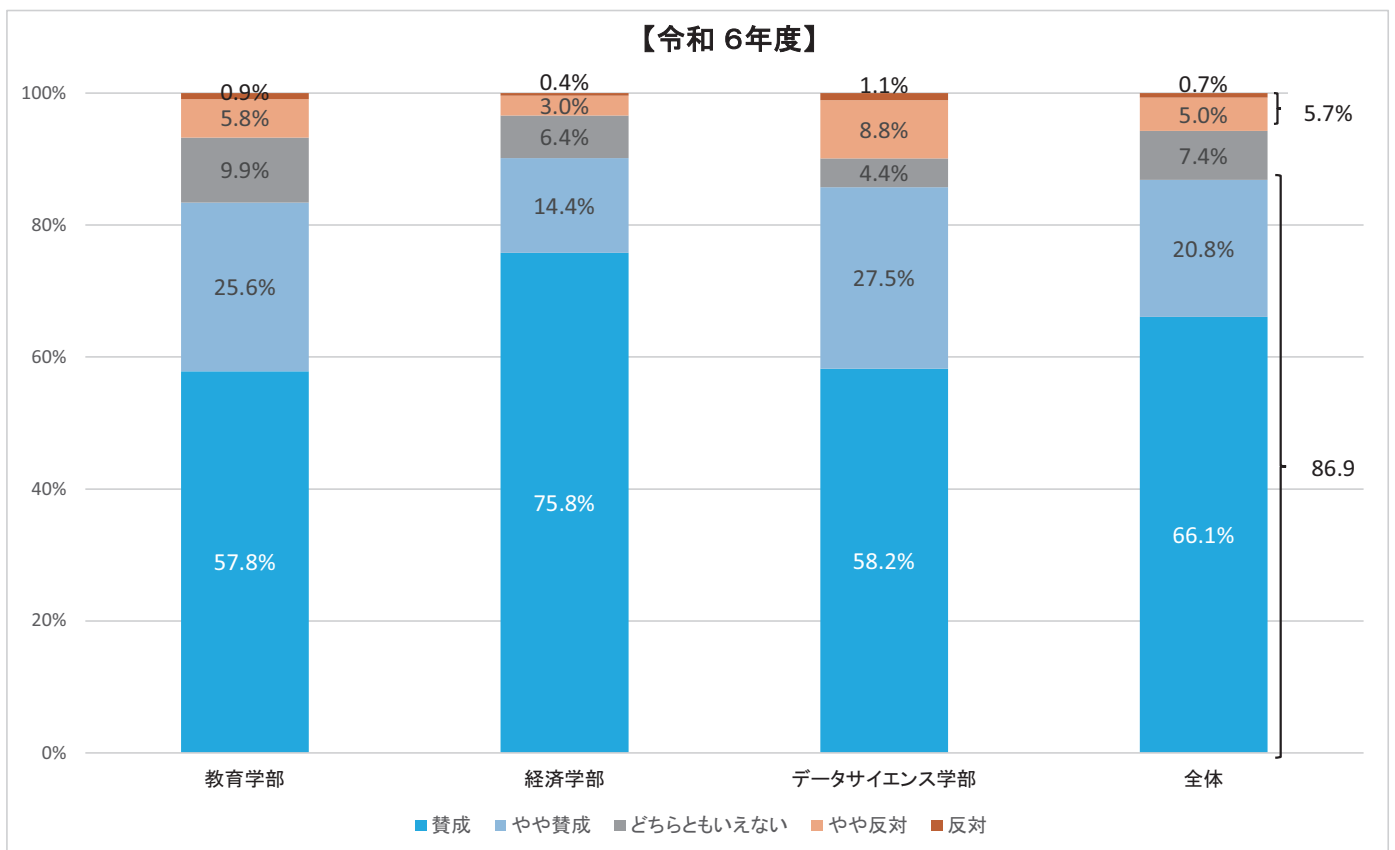
(人)

所属	賛成	やや賛成	どちらともいえない	やや反対	反対	総計
教育学部	129	57	22	13	2	223
経済学部	200	38	17	8	1	264
データサイエンス学部	53	25	4	8	1	91
全体	382	120	43	29	4	578

※研究科・専攻科を割愛

【所属別割合】

所属	賛成	やや賛成	どちらともいえない	やや反対	反対	総計
教育学部	57.8%	25.6%	9.9%	5.8%	0.9%	100%
経済学部	75.8%	14.4%	6.4%	3.0%	0.4%	100%
データサイエンス学部	58.2%	27.5%	4.4%	8.8%	1.1%	100%
全体	66.1%	20.8%	7.4%	5.0%	0.7%	100%



アンケート実施期間 令和6年12月2日～令和7年2月7日
 アンケート実施方法 令和6年度学生生活実態調査<学業>に含めて実施
 回答率 約17.3%

教育改革関連最新トピックス

「滋賀大学数理・データサイエンス・AI 教育プログラム（応用基礎レベル）」全学部から修了者を輩出

「滋賀大学数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」は、令和3年度のリテラシーレベル認定に続き、令和4年度には「応用基礎レベル」に認定されました。特に、データサイエンス学部のプログラムについては、先導的で独自の工夫・特色を有するとして「応用基礎レベルプラス」に選定されています。

そして令和5年度に教育学部、経済学部、データサイエンス学部の全学部から初の「応用基礎レベル」の修了生が出ました。これを記念して各学部代表者への修了証授与式を挙行了しました。

令和5年度は50名、そして令和6年度（春学期終了時点）は74名と年々多くの「応用基礎レベル」修了生が出ております。

記事（本学 HP）

<https://www.shiga-u.ac.jp/24567/>



「地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学部の機能強化事業」に採択

文部科学省が公募する令和6年度教員講習開設事業費等補助金「地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学部の機能強化事業」に、本学教育学部が申請した「教育データサイエンス/ICT/DX 活用による地域教育の転換と地域教員マインドの醸成」が採択されました。

本学が実施する事業では、入学前からデータサイエンスと地域文化を理解させた上で地域枠を設定し、入学後は教育実践力等を基に教育データサイエンス力を強化し、地域教員マインドを醸成した地域が求める教師を養成する。そして、その成果を公開し公教育全体の底上げに貢献することを目的としています。

現在、教育学部では、教育委員会と滋賀県全域での高校生の教育参加体験や入学選抜における地域教員希望枠の実施の検討、そして「地域教員養成プログラム」のための教育コンテンツの作成と令和7年度からのプログラム始動に向けた準備を開始しています。

「人文・社会科学系ネットワーク型大学院構築事業 国際連携型」に採択

文部科学省が公募する令和6年度 大学教育再生戦略推進費「人文・社会科学系ネットワーク型大学院構築事業 国際連携型」に、本学経済学研究科が申請した「データ×アーツ×国際連携による新たな総合知に基づくビジネス・インサイト養成プログラム」が採択されました。

本学が実施する事業では、強化してきたデータサイエンス領域を基盤に「データ」×「アーツ」の教育プログラムと国際連携を通じて、多様な人材の交流を促進するプログラムを構築することで、未来のニーズを発見・創造する力「ビジネス・インサイト」を涵養し、社会において未来創造に貢献する人材を育成することを目的としています。

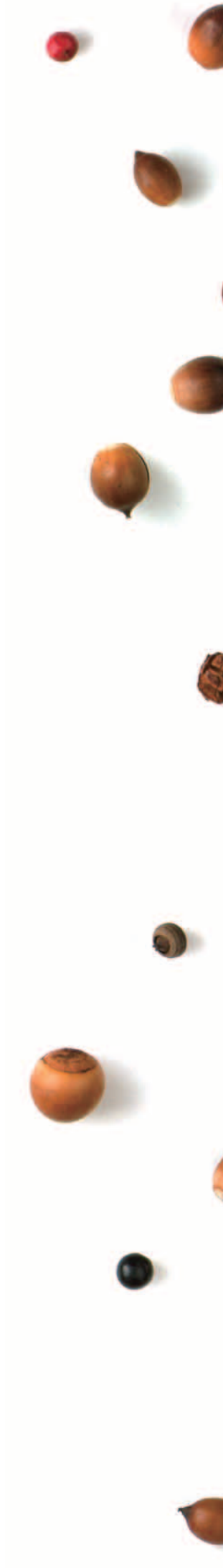
現在、経済学研究科では、海外の大学・機関との連携に向けた試行研修、英語力強化のための補講プログラム、そしてカリキュラムの編成など令和7年度からのプログラム始動に向けた準備を開始しています。

証明書発行サービス開始

学生（在学生及び卒業生等）サービスの向上と滋賀大学全学 DX 推進計画のため、令和6年度末から証明書発行サービスを開始しました。

これまでは、証明書を発行するにあたり、学内の証明書自動発行機（在学生のみ）及び窓口、郵送での対応だったため、学生（在学生）は就職活動や大学院等への進学などで稼働時間外に必要なとなった場合に発行できないことや、大学に来て証明書を発行しなければならない状況でしたが、在学証明書や成績証明書など一部の証明書をコンビニでも発行できるようにすることで利便性を良くすることと、手続きの簡素化による職員の業務負担軽減を目的としています。

今後も学生サービスの向上と教職員がよりスムーズに業務を遂行できる教育環境の整備を進めていきます。



◆ 2025. 3.

◆ 滋賀大学 FD 情報誌
su-L '25/vol.23

◆ 発行
教育・学生支援機構
教育推進部門

◆ 〒 522-8522
彦根市馬場 1 丁目 1-1
Tel. 0749-27-1035



SHIGA UNIVERSITY